

平成25年度研究成果中間報告書《平成25・26年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	34	都道府県・指定都市名	広島県
ふりがな 学校名	ひろしまだいがくふぞくしのめしょうがっこう 広島大学附属東雲小学校		
(児童生徒数)	(492人)		

(本研究に係る問い合わせ先)

所在地：広島県広島市南区東雲三丁目1-33

電話番号：082-890-5111

研究内容等を掲載しているウェブサイトのURL：<http://www.hiroshima-u.ac.jp/shino/>

**【研究成果のポイント】**

○研究課題番号：5(4)ESD

○研究のキーワード：共生社会，相互依存，学びのつながり，評言・意味づけ，社会意識（クラス・学校）

○研究成果のポイント：

- ・互いに高め合う「協力」関係と「競争」関係に着目した「共生」概念。
- ・教師の児童を捉える見方・考え方を広げるだけでなく，児童同士の相互理解，児童のコミュニケーションスキルにもつながる，教師の「意味づけ」と「評言」。
- ・学級経営だけでなく児童の学力向上につながられる，「共生」概念を意識した教科指導。

**【研究の目的，研究内容】**

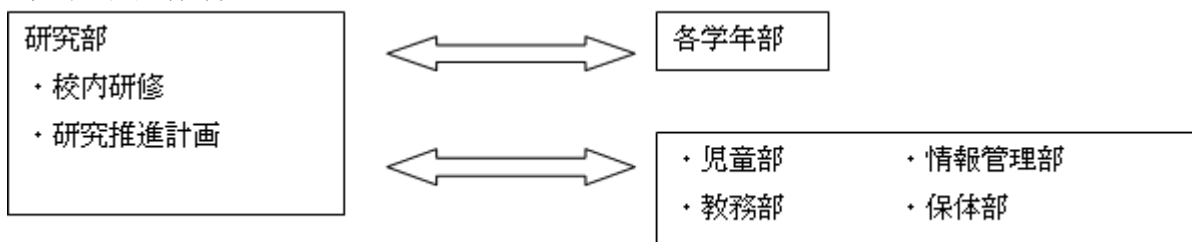
(1) 研究主題

共生社会を担う子どもを育てるESDの創造  
～異なる価値観に気づき，互いを認め合う子どもの育成をめざして～

(2) 研究主題設定の理由

本校では，単式・複式・特別支援という形態の異なる3つの学級を有する。その特質を生かし，学級や学年の枠を外した縦割り活動を30年以上続けてきた。また，学年団を4つの色組に分け，週に一度，学校行事や宿泊学習の準備，簡単なゲーム等を行う早朝活動を行ってきた。その結果，児童は異なる学級や学年でも，互いを認め合えるようになってきた。しかし，学級内に関しては，個々の考えの違いや価値観の多様性を認めることができない状況がある。そこで，これまでの本校の取組や実態に鑑み，研究テーマとして「共生」を取り上げ，共生社会を担う子供を育てるESDの創造に取り組むこととした。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組の経過

平成25年度	前期 (4月～10月)
	<p>【研究部会】①学校全体の「共生」の目標設定 ②研究推進計画の作成，校内研修 ③ESDの理念，先行事例の研修 ④研究推進計画を職員で検討，確認</p> <p>【学年部会】①「共生」に着目した先行事例を参考に各学年の目標を再検討・再設定 ②「共生」をフィルターに学習活動を見直し，整理 ③各学年の目標，学習活動を交流，修正</p> <p>【研究授業】6月：図画工作科・社会科・国語科（*公開授業）</p>
	後期 (10月～3月)

<p>【研究部会】①1年次の成果と課題を踏まえて2年次の研究計画再検討 ②2年次の研究計画を検討・確認</p> <p>【学年部会】○9～1月のデータを整理</p> <p>【研究授業】10月：体育科・算数科，1月：理科</p>
--

(5) 具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

①「共生」概念の設定

本校では，児童が個々の考えの違いや価値観の多様性を認めることができるよう，国際政治学における「相互依存」の考え方を採用し，互いに高め合う「協力」関係と「競争」関係が成り立つ社会状態を，本校における「共生」と設定した。

②教師による「意味づけ」・「評言」の重視

児童が「共生」状態を意識するには，教師の働きかけが必要である。そこで，児童の学習や活動に対し，教師がきちんと「意味づけ」をし，その「意味づけ」に対する評言を行うことで，児童に対する「共生意識の種蒔」を徹底した。

③「学びのつながり」への意識

児童にとってクラスや学校は小さな「社会」である。児童の共生意識を育むには，学活や特活，道徳はもちろんのこと，学校生活の半分以上を占める教科学習の場も重要である。そこで「学びのつながり」を意識し，児童の共生意識を育む教科指導の在り方を模索した。

④学級・教科経営案や目標評価シートの活用

クラスや学校間における児童の共生意識を高めるには，教師同士の連携や共生意識の徹底・向上を図る必要がある。その手立てとして，第1に学級・教科経営の中に共生を視点とした取組を定め，経営案やその振り返りについて全教員で話し合う場を設けた。第2に，目標評価シートを用い，学年部や分掌で児童の共生意識を育む取組を学年初めに定め，夏季・冬季休業，学年末に振り返りを行い，全体会議で検討する場も設けた。

【研究成果とその意義等】

(1) 研究成果

本校が定めた「共生」概念による取組の結果，①各児童の長所・短所に気付くことで，学校行事や日常生活はもちろん，授業においても互いの長所を生かした高め合いや互いの短所を補う協力や支え合いがみられるようになった。②教師による意味づけ・評言の重視により，児童が前向きに学習や活動に取り組められるようになり，教師の姿を通して，児童相互による評言のやりとりも行えるようになってきた。③学級・教科経営案や目標評価シートの活用した話し合いは，教員間の共生意識の徹底・向上だけでなく，クラス児童如何問わず教員一人一人の児童に対する見方・考え方の幅が広がった。

(2) 研究成果の意義等

- ①本校の「共生」概念の中に，「協力」だけでなく，互いを高め合う上での「競争」関係の重要性も踏まえた点は，今日のグローバル資本主義経済下の社会構造を踏まえた「共生」社会のあり方を探る取組として意義がある。
- ②本校が設定した共生概念を児童に育む上で教科指導に着目した点は，学級経営だけでなく，児童の個々の学習意欲や学力向上につなげていく上でも有効な取組である。
- ③教師による意味づけや評言は，教師の児童に対する見方・考え方の幅を広げるだけでなく，児童相互の理解や，教師の姿を通して児童のコミュニケーションスキルの習得にもつながる，意義ある手立てである。

(3) 研究2年目へ向けての課題と改善

ここまでは，教員間の「共生」概念に対する意識向上を図り，授業等での「意味づけ」「評言」を踏まえ，実践を積み重ねてきた。今後はこれらの取組に対する振り返りを徹底し，質問紙による児童や教師のデータを踏まえ，学年末にカリキュラムの再構成を図り，来年度の実践へとつなげていきたい。